



Title	唐代音と日本所傳音との比較
Author(s)	財津, 桃溪
Citation	懷徳. 1932, 10, p. 50-63
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88875
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

唐代音と日本所傳音との比較

詳細なる學術的記述は他日に譲りて、極めて大體にその異同を比較することとする、唐代音は燉煌出土の千字文、金剛經、阿彌陀經の斷片の文字に附せる西藏文字の發音により、日本所傳音は、記紀萬葉風土記祝詞宣命等に見ゆる字音假字より、普通に所謂漢音吳音と稱すものに及ぶ。

一、同音又は略同音と見るべきもの、類

(一) 記紀萬葉等に見ゆる字音假字

漢字字は音、假字の文字、假字はその讀方。羅馬字は燉煌出土三種材料の發音。

度	𑖀	do	己	イ	yi	阿	ア	a	士	𑖀	do	tho
喻	𑖄	yu	知	チ	ci	具	𑖄	gu	師	𑖄	si	
禮	𑖅	le	羅	ラ	la	婆	サ	sa	士	𑖄	ci	q = sh
思	𑖆	si	利	リ	li	庭	デ	de	須	ス	su	
俱	ク	ku	嘉	カ	ka'	施	シ	si	弟	𑖄	de	
歌	カ	ka'	多	タ	ta	致	チ	ci	軻	カ	kda	
起	キ	khi	嗣	シ	si	迦	カ	ka	驅	ク	khu	

威	井	u	祇	ギ	eyi	離	リ	li	野	ヤ	ya
綺	キ	khī	路	ロ	lo	可	カ	k'a	遊	フ	yu

以上は子母兩音とも同一、或はほゞ同一と見るべきものを擧げたのである。s と sh との如き、嚴密に言へば無論同一に列すべきものではないが、双方の材料ともに、どの程度まで古代の發音を完全に寫して居るかゞ更に一つの攻究すべき問題なので、今は姑く(ほゞ同一)といふうちに一括することにしたのである。更に附言すべきは、材料を發表せられし各學者の寫音法が同一でないので、之を一律にすることは、却て誤謬を生ずる恐があるので暫く其儘に記すことゝしたことである。さて右に擧げた例のうち、度の字の如きはド、ト兩音に用ひうれて居る、記には約十回すべてド、紀にはド十二回ト二回。萬葉にはド六十四回、ト一回といふ風に唐代音と同一のものが多數を占めて居るが、和名抄に至つてはト六十四回、ド十一回といふやうに、その數が全く反對になつて居る、これ等は時代と字音の變化を見る上に、興味ある事實である。

散	サ	sa(n)	先	セ	se(n)	信	シ	si(n)	世	セ	se(hi)
達	ダ	da(e)	新	シ	si(n)	甲	カ	ka(b)	男	ナ	nam

以上は音の一部を取つた例である。

三	サム	sam	南	ナム	nam	廉	レム	lem	散	サニ	sam(i)
---	----	-----	---	----	-----	---	----	-----	---	----	--------

樂	ラク	lag	各	カク	kag	色	シキ	sig(i)	落	ラク	lag
薩	サツ	sai	壹	イチ	it	塔	タフ	tab	籃(籃)	ラム	lam

以上は假字二文字の代りに漢字音を借用したものであるが、その音がみなよく燉煌出土のものと同つて居る、尤、入聲音 *k*、*t*、*p*、は皆ほとんど例外なく、*g*、*r*、*b*、を以て寫されて居るので、これ等を *k*、*t*、*p*、に直せばといふ條件は附けねばならぬ、(この條件を附けるといふことは、即日本に於ては、*g*、*r*、*b* ではなく *k*、*t*、*p*、であつたといふことになる)。此等の用例は、鹿持雅澄の萬葉集古義總論に見て居るので今は省略に従ふこととする、此等の外、古書に見えたる地名人名には唐代音の係を存して居るものが少からずある。

丹	タニ	tan	丹波	タニハ	tan + i
難	ナニ	hdan	難波	ナニハ	hdan + i
譚	サメ	san	譚岐	サメキ	san + u
散	サメ	san	散吉	サメキ	san + u
信	シメ	sin	信太	シメタ	sin + u
因	イナ	in	因幡	イナハ	in + a
員	メナ	win	員辨	メナハ	win + a

(難は漢音タン、吳音ナンである *hd* を以て寫され居るものは多く *n* に變つて居る。)

參	サ	sa	參	イサ	sum + a
男	ナ	nam	男信	ナメシ	nam + a
南	ナム	nam	印南	イン	nam + i
甲	ナメ	nam	南佐	ナメサ	nam + e
雜	カハ	kal(p)	愛甲	アエカ	kap + a
	サハ	'zab(p)	雜多	サハタ	'zap + a
法	サビ	'zab(p)	雜賀	サビガ	'zap + i
	ホホ	pab(p)	法吉	ホホキ	pap + o
達	ダテ	dar(b)	伊達	イダテ	dat + e
色	シカ	sig(k)	色麻	シカイ	sik + a
直	ザカ	jig(k)	安直	アザカ	jik + a
作	サカ	tsug(k)	美作	ミサカ	tsak + a
樂	ラカ	lag(k)	相樂	サカウラ	lak + a
宿	スキ	sug(k)	揖宿	イフスキ	suk + i
當	タギ	tan	當麻	タギ	tan + i

(sは多くは我邦にてはsとなつて居る、後段に見ゆ。)

相 サガ san

相樂 サガラカ san + a

香 カグ han

香山 カヤハ han + a (h)は多くkを以て寫されて居る、後段参照)

以上は三種材料中に見ゆる文字を含むものを、手に信せて抽出せるに過ぎざるが、類を以て推せば此外にもなほ多數を擧げ得る。當、相、香の如き、後世にてはみな語尾の *n* が、ウの假字を以て寫されて居るが、此等諸例に就いて見れば、我が祖先は、漢字渡來の始に於てはなほ *n* は *n* として呼べるなるべく、如何に忠實に彼土の原音を傳へんことに留意したるかは、下に陳ぶる假字遣の條と併せ見て十分に之を知ることが出来る。なほ別に項を設くるの煩を避けるが、語尾の *m* と *n* との區別も亦我邦古代に於ては、明瞭に呼びわけられ、唐代音の示す所と全く一致して居る、

我 ガ hgaḥ

疑 ギ hgiḥ

義 ギ hgiḥ

吾 𐑦 hgo

施 ダ hda

右は韻鏡に於ては疑母に屬して *ng* の頭音を有する文字である。此場合に於て *h* は鼻音であるらしい。(施を除く)、我邦のガ行の假字が果して *nga* *ngi* 等と呼ばれたか *gi* 等と呼ばれたか或は單に *ga* *gi* 等と呼ばれたかは、邦語の古代音韻組織に暗い私には明瞭でない。併しガが語の末又は中に來る場合には今日なほ *nga* *ngi* 等の音を以て呼ばれて居ることが決して少くない、疑を存して姑くこゝに攝する。

(二) 其 他

且	dan	朕	eu	駕	ga	群	gun	雅	ga
意	i	音	'im	持	ji	見	kyen	間	ken
今	kim	故	ko	過	kua	果	kua	俱	ku
肩	kyen	稼	ka	嘉	ka	歌	ka'	軻	khə
抗	khə	贖	khə	驅	khə	勸	khwan	機	ki
飢	ki	謹	kim	禽	kim	功	kon? ko?	鵠	kon
冠	kwan	臨	lim	隸	lei	林	lim	論	lon
兩	lyo	糧	lyo	念	nem	囊	no	先	sen
心	sim	沙	'sa	是	'se 'si	身	sin	舍	'sa
誰	cwi	俶	cug	賞	co	觴	co	守	ciu
神	cin	市	ci	塞	sai	祀	si	肄	si
素	so	類	so	謝	syə	寫	syə	迨	syə'u
相	syo	廟	syo	象	syo'o	擔	tan	典	ten
但	tan	顛	ten	他	ta'h	天	te'n	歎	than
耽	tam	畏	ui	己	yi	喻	yu	以	yi

也	ya	翳	yei	伊	yi	貽	yi	猶	yu
右	yu	猷	yu	然	zan	繞	zehu	人	zin
二	zi	而	zi						

以上の中には、相、糧、功、囊等の如く彼地にて既に語尾の變化を來して、日本に於ける後世の發音の如く變つて來て居るものも便宜含めることとした。

嚴	hgen	言	hgen	眼	hgan	議	hgi	獄	'sag
嚴	'gan	鷹	'gan	藝	'gei	儀	'gi	銀	'gin
寓	'gu	那	hdah	難	hdan	云	hun	運	'un

以上の中、gを以て主音とするものは皆韻鏡に於て疑母に屬する文字である。

惡	ag	讀	dag	獨	dag	著	'sag	直	'ig
國	kog	穀	kog	祿	log	轉	hnog	索	sag
欲	yog	若	zag						

以上入聲の文字、gに代ふるにkを以てすればわが所傳音と相合致する。

悉	sir	日	zir	一	yir	逸	yir
---	-----	---	-----	---	-----	---	-----

以上はrに代ふるにtを以てすれば、亦よく合ふもの、次に西藏文字の綴音が、わが國の假名遣と一

致せるものを舉げる。例によつてbはpとして考へる。

十	stb シン	塔	tab タン (萬葉集、絶塔 ^{タユダフ})
雜	zab ザン	甲	kab カン
業	hgeb ゲン	中	gun チネウ (・nはrを以て寫される)
量	lyan リヤウ	上	'san シヤウ
動	don ドウ	有	'ihu イウ
又	'ihu イウ	康	'khan カウ
糠	'khan カウ	孔	'khon コウ
貢	kon コウ	公	kon? コウ
塞	le'u レウ	農	non ノウ
小	sehu セウ	消	sehu セウ
修	sihu シウ	岫	s(i)hu シウ
當	tan タウ	東	ton トウ
養	yan ヤウ	要	yehu ハウ
由	yihu イウ	綱	ye'u ハウ

頭音が異つて居て、假字遣に合ふものも亦少くない、上に地名の場合に述べた當、香、相等の語尾を保存して居ること m と n との嚴密な區別を存すること、西藏文字の綴音と假字遣とがよく一致すること、其他和名類聚鈔に、者^ッ 所^ッ の寫法を以て、シャウとシヨウとの區別を立てたこと等を考へ合すれば、如何に古人が原音の儘の發音を守つて居たかを推測することが出来る。以上は類似せるものゝ大略を挙げたのであるが、下に子音母音に變化を來せるものゝ大體を舉げて見よう。

一、子音母音に變化を來せるものゝ類

この類に屬するものは、子音のみ變化せるもの、母音のみ變化せるもの、或は兩者同時に變化せるもの等があつて、到底簡單に記述し盡されぬから、その主要なるものを取つて、數目のうちに一括することとする。

(一) 子音の異れるもの

(1) h — k

この類は、唐代音 h にして、日本所傳音 k なるものである。

孤	ho	華	hva	漢	han	希	hi	喜	hi
歡	hvan	護	ho	香	han	下	ha	何	ha

閑	han	韓	han	煌	ho	廻	hwai	會	hwai
桓	hwan	刑	hye						

等であつて、母音もともに異つてゐるもの

等を加ふれば約三十を算する。

恒	hin	解	hehi	後	hihu	會	hue
---	-----	---	------	---	------	---	-----

(2) g—k

狂	gan	漢音キヤウ	吳音カウ
解	ge	漢音カイ	吳音ケ
既	gi	漢音キ	吳音ケ
故	go	漢音コ	吳音ク
九	gu	漢音キウ	吳音ク
假	ge	漢音カ	吳音ケ

これ等は漢吳音ともに清音であるが其 (gi) (tgib) 及の如きは漢音はキ、キフ、であるが吳音はギ、ゴフである。母音の異なるものを合せて約十四。

(3) st—s 又は sh (日本所傳音は省略)

眞	tsin	尊	tsou	又ハ	tsin	讚	tsan	作	tsag
---	------	---	------	----	------	---	------	---	------

千	tsen	此	ts'i	莊	tsan	次	tsi
糟	tsao	接	tseb	節	tser	親	ts'in
紫	tsi	宗	ts'on	足	tsug	將	tsyo
稱	ts'on	進	ts'in				

等で、日本にては皆サ行に發音せらるゝ、此類は隨分數が多く、

即	ts'eg	則	tsig	增	tsen	威	ts'ig
---	-------	---	------	---	------	---	-------

等の如く、母音の變化をも伴ふものを加ふれば、約四十字を算する。

(4) c — s ch — sh — (同上)

者	ca	之	ci	至	ci	終	chun
振	cin	用	chur	衆	cun	障	can

等、母音の異なるものを合せて約二十四。

(5) dz — z (同上)

前	dzen	自	dsi	の類七。
---	------	---	-----	------

(6) ds — s

左	dsa	載	dsai	晉	dsin	組	ds'o
---	-----	---	------	---	------	---	------

等約十四。

主要なるものは大體右のやうであるが、日本に於て普通吳音のみ用ひられて、漢音は殆願みられざる樹、甚、事、時等の文字は夫々

樹	su	甚	sim	事	si	時	si
壽	'sihu	受	'sihu	侍	shi	實	sir
隨	sui	尋	syim	授	'sihu		
墻	dsyo	佐	dsa	宰	dsai	集	dsilo

と音せられて、所謂漢音と同一である。此等の類も可なり多い。又 殆 dai 岱 dai 達 dar 等の如く日本の吳音と一致するものもある。

(二) 母音の變化せるもの

(1) i — o

恒	hin	根	kin	語	hyi	僧	sin
得	tig	等	tin	燈	tin	則	tig
即	tsig	應	in	與	yi	極	gig
勅	chig	穡	shig	女	ji	億	ig

等の例で、其數約三十四。

(2) e — a

大	dehi	在	dzehi	來	lehi	倒	tehu
界	kei	階	ke'i	更	ken	高	ke'u
號	kweg	操	tshe'u	策	cheg	乃	hnehi

の類で約二十。

(3) i — e

亦	yig	績	cig	的	dig	嫡	dig
夕	syig	易	yig	戚	tsbig	寂	dsig

等の類、約十。

(4) a — e

談	yan	善	zan	設	shar	厥	kwar
譚	knyam	堅	kyan	筵	yan	譚	yan

の類、約十八。

此外、o — a 例卷 kvon

n — o の例豫 yu

等の類種々あるが、その屬する字數は、さして多くない。

(三)子音母音とも異なるもの

後 *hiu* 恒 *hin* の類

以上ほど概要を盡したが、讀者は、唐代音とわが國の傳來音との内に非常に密接なる關係あることを否まれぬであらう。上に述ぶるが如く子母兩音の夫々相異なるものも相當あるはあるけれども、決して無暗な變化をしてゐるのではなく、夫々音韻學上より見て、しかあるべき變化をなして居るに外ならない。日本所傳の音と、燉煌出土の材料とに、これ程の類似點を見出し得ることは、頗る興味あることで、日本音が支那古代の音韻調査材料として、貴重すべきものたることを物語るもので、本居宣長翁の「皇國の字音今傳はるところ漢吳ともに、古に定まりつるまゝにて、訛れることなし、是れ漢國にては、其音自然の生物なるが故に、方土の異もあり、古今の變もあるを、此方にては字音は自然の產物に非るが故に返つて異變なきなり。」といふ議論の、不滅の確言たることを示すものである。

(筆者音韻學言語學上の智識に乏しく、分類の法、寫音の法、其當を得ざる所多し、偏に識者の叱正を乞ふ。)

(靜安學社未刊稿)